誹諧古今句鑑

春

へ 5
1190
1

誹諧古今句鑑序

凡誹諧は撰輿をもつて流行の論ハ古今の諸書に詳なれハ爰にいはす只今抄出さる流行はそれに及ていにしへを探り求る人なり中古に心とおもへる人あり故に其師家流風匠なりさるハ唐やまとの歌にも代々の風調にかゝはりある有といへと秀逸に至てハ更に新古の論なし誹諧ハ殊に要法ともていひ出るハ古今不易の名吟も児俗にも翫ひ侍る唯いふへハ親句を好みて

門 和 1.150 巻 1-4

疎句ハ稀〻也貞享元禄に一変せしより疎句を
専として親句ハ絶てなきが如く今そのむきに
古風と心得捨る人も亦多かるべし其疎句ハ詞かろ
くして情深くいひおもむきもひとしれハいふも
當時の風俗に何につれ東に柳和歌に六義ある
十躰あり誹諧も其名義にならひて先指旅と
さらに至てかれと句作ハ親疎のわかれを
親疎とまて句の稽古を論せむや即竊に是と
松もふる年何々積るにことよせよせの先にうく
かゝさる方より古今句経と題せし一小冊を得て

編ミれの趣意いにしへと捨れ今になづまれ親疎に
片寄られして志ミも不易の句ゝ也世ゝにハかく巳ゝ
き人もたえざるものをや訪ひて讀らんする艸稿の係
なきハいつちれるる人に見撰者の名もなく存亡の
程さへ知りがたしよりて只にのやしく床しくのみ思ひ過し
の其ほけ撰乃句準におあるむとおほしき古今これ
句を書添えむとおもしくに志除せしにいつとなく四付
四巻とハなさにきさ又つきまでに門し志の人々くなりて
叶よしと又ゆめ今ハ写とらんよも筆の労わからされも
梓行して各得むことを求むさてこそ前撰のぬし

ねは道にむ移くるゝ人に悟りなきよしもあらねと
初学の人不易の所より入るハ流行ハ修し得て後
自在ならんとの微意に起きハ撰りに増補せし罪
ゆるしたまへと志かいふ

安永五年丙申秋

荏土神田玉池　谷素外誌

凡例

一此撰初学の助となさん事をむねとすれハ古今の
世にある句といへとも不易なるを除き外と
人えらひ其意をうけて増補し侍るの故に前撰
の句準ずに洩らさる句なきハ年紀題せさるなし
とも洩を

一題の序次ハ通俗志に倣ふ其部類に寄せて聊
前後の違ひもあるへし

一諸書の季よせに出されしとも今当時に行ハれて拠なり
見ゆる其句の季とするハ出す但行事の内

屏東実西まて東の遠にあつまり此撰句法
趣意とまて察せよ
一句の次第ハ古人をもて先とす今世乃人ハ高貴
又ハ其師家たりといへとも筆のまゝに載て
一古人の句に再案とみえて一なに等しうける
なり又書写の誤と見ゆるも有正しからんハ其まゝの
よろしきをとる傍に支へきもあらんハ本書に
まハ略して又同句まて作者の異なる有此らハ作者
あらはと混す但作者あらはと出せる句も部立の
読人知らすの類ひまたハあるへし

凡例

誹諧古今句鑑　春之部

歳旦

朝夕乃人もめつらし今朝の春　大坂 梅翁
年の花もほの〴〵明や初桜　季吟
元日や何にもをしむ朔なから　大坂 忠知
永日の松嶋も霞かすミ　西雀
年ふりや家中の礼ハ星月夜　其角
元日やたれて花乃物のふる　嵐雪

元日やされハ神川の名乃色　大坂 來山
かのくと鳥くろむや甚れ去ゝ　跡坡
蓬莱に見遠かる目出たさよ　大坂 山店
老ゝ眼よよしくもの初暦　法策
不尽白し唯春たつとい斗　心祇
舞こゝハ去ゝ流ゝふれ人通　茶狐
人ハ武士星も掛とり明にけるゝ
提燈に消ゆる霞む旦この町　作志しるべ
浦の去ゝ子なる飛去ゝ明け色　涼帒
本艸まて女男のまくらや去ゝ　栗堂

明て春大魚うかまむ海乃面ゝ
なゝ神代もや人の代や初霞　梅郎
系初や大振袖ふりるけもむゝ
初東風の快さに胡ほうを　呉夕
物乃具を飾る時代かゝみ餅　紀亮
ひらく井の家や立のほる初霞　素芥
元日の賓客なれしや我も谷　左簾
春なれや人かのくと菜艸履　不言
うらひもふ又曙や雑煮ゝ
若こともさなれや子ともせれ久しふ　賓馬

年ごろは昨夜ハ寐ぬ夜表辰　久喜　軽舟

手玉やほのゞに告る業は端　平砂

初音やものを学ぐはちゝ詠　津富

稚ひや七日を待さぬ人の春　ヽ

は今朝の雨を十日はちしめ哉　花藍

早春

松とりて常の旭となりにけり　不角

表もやく礼義和らく女のか家　春来

池あらして梅にちらしけ亦礼若違　蒼狐

名返ハ笠着て来たう女なる祭　ヽ

注連縄に古井の水も表めきぬ　春郊

若餅に肌観勤る下部のかな　久喜　寳馬

迹唄や脊丈伸てもむそめの子　玉圃

七種

七くさや神にからかりて　朝鳥　其角

七種や漆尺部屋も貿ぬ吉　笠詠

若菜

年玉乃菜もせりかしこ穀の里　宗瑞

雛容や若菜摘きて川むかひ　雅邦

ちらほらと素試ミや若菜摘　菊人

鉛路ハ跡や雪間の若菜笑ひけり　慎我

若菜摘きの初そのや都人　暮十

夕日よし初雪ふりれ己のな緒　木丹

若菜つゝさそふもに日もゆるまゝと　李克

削掛

削かけも年やむ月の家桜　左籬

柳とハ誰気志ら髪れ削掛ヽ

風そよく新端のもや削かけ　佐幸

藪入

藪の也洲艸わけて芝の海　琴風

藪入乃我衣たのしく更ふ急　寥和

薮入や見らぬ日数を伯母のもと　五連

やぶ入や花なる芝居明うつす　笠砂

薮入の我家と浅き姿かな　素芳

やぶいりや故郷の水を唐にしき　津富

雪消　残雪

一物もなしとや消て雪佛　風虎

まはらはとまゐて猶消て雪仏　伊勢 文性

とくや風梅見きむとて雪の封　涼山

雪とけや松もひさしの手如意が嶽　左簾

雪解や流れに流れゆき横日影　津宣

雪なくは寛うんものや去れ不二　木丹

鳥の叶なる人にかまけて

打とけぬ雪や深谷の庭まろ　京 貞室

春雪

春の雪雨ふちに見ゆる何を幸也　加賀 一笑

淡雪や去れものとて濡て降　蒼狐

積り得ぬ雪や木芽に笑ハるゝ　貞知

昼寐して惜やまとも春の昼　雪高

きたうちやちらりと雪のかへり花　貫太

ふるやとき雪やそらきえの雪　素云

泡雪や柳の雫うめ乃露　左簾

梅

難波津に咲夜此花や梅花　梅翁

とくハ句に梅や向方の花ありせ　ゝ

さく梅のほと月出て紀よもかし　玄札

梅か香にのつと日の出る山路かな　芭蕉

梅ちりて其から後ハ天王寺　伊丹 鬼貫

梅か香に又あく留や誰曹子　大坂 戈磨

まうし枝の鶯めやうめの花　其角

梅一輪一りんほとのあたゝかさ　嵐雪

此梅とたるのた月の匂ひ哉　ゝ

ちる梅や去りし家にもなき句哉　千川

照る日や梅たゝくハ早のある程に　綢柯

皆くに咲揃たれと梅花　野坡

枯さ花と折もあさに梅のなき　加賀 従古
見といふ名にハかしこし毒花　伊勢 乙由
古寺や宿毎に尼ある梅一本　柳居
梅の香や障子の外了猫の声　安士
梅咲て鶯ならぬ鳥も嬉し　春来
うめの香や足もとくて着もの　加賀 希因
梅咲くや心のなぐさむしたし　涼袋
宮ゑん咲や何か降ても春ながら　加賀 千代尼
梅の香や戸ざせば君ハ見えねと　〃
古巣や梅よりさきて去年去し　蒼狐

数なれて一枝さびぬうめの花　〃
人鬼ハまじとみ空に宮戸の花　〃
誰がの梅咲にけり樹参の枕　〃
見つ絶て梅の咲き出にやるも有　万立
枝見へハ匂きと見慥が洩梅の香　栗堂
梅が白し浅黄に香けはしまつ初　貞知
梅が香や香でそく宜け偲　亀文
遠ろやひくゝとも梅の風まづハ　〃
去地かあて誰の梅け木ふりかな　雅郎
梅さくやもどりや奉けもころく　〃

梅の香や朧月にさへかくしにもきくと
常に気のつらぬ末社あり梅かをと　素竹
捨杖の梅に客なりけり茶淡　公虫
ね梅や日のいろにもれかさし初　花菱
咲きのみえ川く梅のふもまろ　吐鳳
早白し明日や梅さく花の加減　曳尾
梅咲て坐すの茶も葉みを忌　旌扇
香と隣く梅に明るき面東　宝國
梅の香や鼻うつさむる夜の夢　治織
手茶碗も梅に巣をゝ日和かな　宗雪

実を持まといさぬのうりや梅ぞ　好義
梅既乾蝕に花さ枯てなりゝ
入れみ一條白し理路の梅　素角
学の道も見え通路梅が　竅得
梅さくやけさふるところ土龍　常路
結精す素わ白ひや梅の花　常泉 水樹
老梅のむかしくを匂ひけり　岩槻 何来
肥らさるにほひを梅のさかりかな　左麓
梅の香や見れも玄議とかり　五隨
正月を梅ひらかして咲ぶりの柔　春堂

八年の梅残る枝なく咲にけり　南部乙外

保さ頭の日も塞きぬ神の梅　笠孫

旧知人の心とかはす梅見哉　宝馬

と見しれ咲乍も色梅の猫　ゝ

明暮のころを

打て居ふ萌かけの垣の梅　佐徳

池邊暖

鯉乃遊ぶ水隈のぬらく梅すゝし　羽笠

北を背にして

その中のみ巻井と梅のまさり哉　嵐雪

郊外

梅の宿川人や歩も日に投頭巾　楽水

閑居

庭掃け小袖新らしや梅乃影　栗堂

菅神奉納

随身の弓矢ゆるしけし梅の香　把菊

若草

若艸や古橋の保をうしなし　抑居

若草や麻も霜よけに山乃裾　和水
うらゝさや桜に花のはゝぬうち　秋色
若鮎や小川流るゝ塀のもと　不言

土筆

うれしさや袖にほこりの土筆　大坂 玖也
黒胡麻で寄あへぬ程つくつくし　其角
ほくほくし出るも嵩やかくれ汁　久世 左簾
春乃野に夏色の土筆生て名　窪舟

畑打

動くともみえで畑うつ麓かな　京 去来
畑うちの遠うにひとりうち引　行露

猫妻恋

恋を遠そ思ひしや猫の恋　京 昌房
斑猫そ捌うて落す鶏乃数　沾徳

猫の恋初てくろ帰て哀なり　野坡

うらやまし思ひ切時猫の恋　尾 越人

さかる猫おもくハ出す命かな　已払

出てこい人ならいふにねこの恋　貞佐

鼠とる思案の外や猫乃恋　楼川

叱るなよやむ時ハ止む猫の恋　小知

乃ら猫のうき名ハちらぬ屋根乃上　笠袮

うかれくの恋かや猫乃痩く斗　何来

黒かる夜や恋労れる猫の声　宅馬

白魚

しら魚や石に隠れハ消ぬへし　松風

白うをの一流れや汐境　壷中

しら魚れ向き向きや枕の色　之道

白魚乃うき身みかるや後夜け鐘　馬光

春日

まん丸に出れともなか春日かな　山崎 宗鑑

春の水ところどころに見ゆるかな　鬼貫
日の春をさすがに鶴の歩みかな　其角
不二に添て三月七日八日かな　京　信徳
三尺の鯉をどる見ゆ春の池　仙化
美しき鏡うきたつ春の水　舟泉
春や動く田螺やうごく時乃移　風松
永き日や沖あめまれ弱る音　野水
春めくや人さまざまのいせまいり　荷兮
永き日や用し来して彼の波　馬光
のどけさや何その庵三日の月　乾什

春の日や静かに落る杵乃音　参伯
芥乃葉の日さしに寄し流の春　梅邦
みなところ山より人とところ春の朝　栗堂
天蚕織て人を招るや春日和　涼山
田に宿乃まるき春定む旭一のな　沌亮
盆石に夜の若れ行や春南　来遊
山陰や漸きえ残雪の艸の葵　玉圃
世の春にそけものすゝめ撫弘　丶
ながき日やまてとこそくねらし舟　素人
浮雲乃停てやとる日のながれ　平砂

日に肥る鴨のこゑや葵の水　津富

日や緋地竃にたまる水の泡ゝ

岩槻

葵さすや柳のもとれ蟹乃穴　崔郎

動て宝ろに含しらりハや年をとりてしか

蓑の川と岩根に走れ済日は去迎　栗堂

霞

春里み麦や菜のねや桐霞　おふつ

砂原や舟に縁とる夕まつゝ　涓泉

里かすむ夕ア越松乃さうかな　野水

香手すきたりや二王のまみれ膳　春末

鶯にも袖の羽ふりや夕このきみ　薬狐

ふた洞霞定まれ夕かすみしたゝ　

あをけなさくぬ桜乃木も浴とき　梅郎

梅の小く四田の塘や夕霞　新舟

あゝぬるみなに妹かひや朝くすき　太布

きゝぬくやたるに霞て妹背山　如雷

日を横ゝ舟鬼かすむ夕ア北　桃水

八景の名このすみ之井の遠　不言

陽炎 遊糸

枯芝やゝ陽炎の一二寸　はせを

陽炎やほろほろ落る岸の砂　伊賀 土芳

いとゆふに動くや去年の古暦　乱絲

ほくくと糸遊や空のむさほりき　才麿

陽あふふ落ち干る才の匂ひの哉　普船

かけろふに畢あそむる池一つ哉　涼佑

陽炎や鞠ハ跡垣と松よ比　梁山

かけろふや落鞍並る縁の上　曳尾

陽炎や米搗けし寺屋井　素角

枝戸と陽炎のほるあさ日哉　其礼

かけろふやいのちも見ゆるつくつくし　蒼雨

陽炎やおそよく柳小鴻出させ　芦英

かけろふやけさ落上し瓦竈　花弥

春夜

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉

ちりしくをさくらの上なる月夜ゝ

海棠の花ハ満たらぬ夜の月　普舩
三日月乃梅にさはりき斜なり　不角
梅折れてそおの香も動く月あかり　巽窓
此うへや互の月夜山さくら　心祇
三日月ハかくれて柳の烟かな　梅郊
广乾と川きえし東乃宵の雲　角来

朧夜　朧月

朧くともし次尺るや淀の橋　鬼貫

猫の恋やむ時閨乃おぼろ月　芭蕉
水おちる枝や向くそてもきく春の花　義流 兼正
あまおれをながめて春ハ朧也　支考
味噌屋の蔵こゆる匂ひや朧月　史邦
祢[illegible]きさきぬ夜とすれハおぼろ也　去来
錦の赤も志ゆまる桜ほど月　豊後 紫道
ゆらくゆくおともこゑ朧なる　希因
鶯乃月かゝる嘯むあそ出ぬる　貞知
佐保姫のうしろ姿や朧月　梅郊
月おぼろ石竹[illegible]の[illegible]許　栗堂

おぼろ月や例に賊けなき伽羅　吐風

剥落て毛虫涌らん朧月　平砂

朧夜や倭のもろこし糸柳　万古

花乃香の外とハ走に朧月　雀舟

春風

三日月や何そのはなも春の風　貞知

春乃風おふに春ときくの手　其葉

遊女の西に

春風や柳のみどりも汚そふ哉　玉圃

春雨

春雨やむまし人のちくら寄　貞室

春雨や濡らぬ家まもらふさん摘　尾張 来山

春雨やぬけ出さ侵の横乃穴　丈艸

春雨や菊も持てし露てもなし　加賀 桐之

春雨や拍子よろしくて蝶々の手　東来

何にある出やしひと川東け雨　長崎 治楓

春雨やうつくしうなる物ばかり　ちよ尼
春雨やものしまらぬ海の音　浪華 西羊
常に見ぬ猫や彩けれ春乃雨　栗堂
春雨やぬれてきまする隣の友　梅郊
切売を猿ゆく舟や春乃雨　平砂
はる雨や西を見昆布の露心　五種
春雨や降ながら干る磯乃汐　宝馬
捨もせし庭も芽ぐし春の雨　五梁
雨一夜春のこゝろに成にけり　晋窓
ほのまく焼地も雨の若野哉　乙外

見えてふるさと山ともと春の雨　羽州 素盈

雉

蛇くふときけハおそろし雉の声　芭蕉
うつくしき顔かく雉の距かな　其角
人踏し雉を呑る犬のこゑ　ゝ
身ふるひに雨ちれ雉のみだれ哉　轍士
雉啼て土いろくれ草となる　伊勢 ちよ尼
何を見て春の初や若乃雉　岸虎

乾坤を我ものあそや此羽乃雛　呉朝

これまねの月にしづ声や園の雛　其巣

雛啼や旭乃さやけき小松原　花城

野も山も二月にあすれ雛の声　不退

谷の戸も我隣て出る雛の羽音哉　拙水

さそひ出て雛の羽そは旭よし　治涼

鴬

此のころ鴬啼や園の竹　伊勢 一

鴬やまん丸に出る声の色　梅翁

うらひその一声も念と入に亀　利牛

鴬乃啼けハ何やらなつかしう　鬼貫

明ほや鴬とまるたそほとく　一桐

鴬や竹の枯葉をふみ落し　荷兮

うらひまや一声の声ふる敷　渋石

鴬の啼日ハ竹を走りまわり　乙由

宿のうちものめぐさ声や枠の奥　希因

鴬も枯まる中の葉むらも　曲菴

鴬とりとも引伸す声乃中　旧室

鶯よ竹に雀ハうハのそら　蒼狐
うぐひすの声や急ぐ沙汰せし　ゝ
鶯やいまさそかれ梅に　古 秋瓜
うぐひすや奥も遠山の眉を引　佐保丸
鶯乃声そ乃際や胡ほう哉　紀亮
鶯の竹にあからむる日かげ　楼川
うぐひすは夜詠まる声まりの　小知
鶯やうゐゆく水のわかうこ　雀郎
鶯や此径まて寺の香も　蛙声
鶯や声おさやかに上手藝　千外

うぐひすの去ふむかの日和かな　津富

雲雀

晴天に野を引かるる雲雀かな　蒼狐
雲雀きまきの日も頂上のゑかかな　呉龍
舞あかる雲雀やいつき昼の星　存義
落る日に咫尺高し舞雲雀　丸室
高微ちる雲雀におくる雲れ色　雀舟
神の露のほかをてつんまる雲雀かな　花縣

あをき帆に引揚て亀世花籠　近橘

栁

青柳の眉かく岸の額かな　伊勢 古武

入相のすゝく残る柳かな　調和

おもひ出て抱きよせたき柳かな　戈磨

青柳乃しだれや鯉の走りぬ　一啖

けんかねと見のながむる柳かな　野坡

笠やちる柳くゞりて引てゐる　紅緑

旭二分春の動くにほひかな　蓑笠

詠るゝ目の芽郎如柳かな　月下

新室し投入春夜の簾　貞佐

青柳や二節三ち老木かな　柳居

まろ柳にさほ遣かるよ是月哉　宗瑞

風の日も柳に似ける枝もなし　蓮之

青柳や細き雨さく春乃色　古 秋瓜

青柳や揚ふ手よしたるれ後　栗堂

古庭や柳に見ゆる風のいろ　亀仙

うくひすの顔にそちよ柳哉　玉圃

青柳や見てゐるうちも伸るらん　寶馬
朝々に雨と見ゆる青柳哉　笠政
ちりきるや春の柳のみえにけり　乙外
明方のくらきに随ふ柳一の枝　南部 錦月
見ゆるにはつ人もせのきれぬ柳かな　水樹
老妻がしらがおろさむとおもひし時
剃落て柳にも似ぬ髪かしら　心祖

椿

はき掃除してから椿散にけり　弥坡
一むしろちらりやけりの赤椿　玄来
鳥の音も聞は家陰乃赤ら椿　文考
春あふれそよくと落る椿一の枝　心祖
雨落てころびは落るはなさきけり　蒼孤
折る椿花もちらかりしぬるとも　亀文
落ぬ際に残る念なし椿哉　春郊
落てもちれしぬ花八重の古椿　貞川
花椿落てさへ蜂にけられたり　沾哉
なからの葉のそむきくや花椿　李門

押あふて落るにひらく椿かな　笠齋
赤椿ちる時雨のちりこほれ　律富
咲にゆるさぬ口あるも八重椿　花縣

海苔

花誘ふ嵐やよまれさらし海苔　鳳虎
まろうたに波をたゝぬや椿のか　仙志流
ゆく水や何ふとゝまる海苔の味　其角
網の目ゝ風や海苔本の丹識も　井鳳

初午

初午やゆくちの乳母も夕月夜　沾徳
初午やほのめく狐窓は黄八丈　柳居
二の午や落くハ茶屋も非番ゝ　蒼狐
初午や妹か垣根の飴おこし
初午やのほれハくるる戸人　酉爾
初午や序や窓みも梅の掟書　存義
二は午や昆布ふ山椒の被ゝやけゝ

郊行

初午やくゝませるも皆ちゑ　梅郊

涅槃会

涅槃会や妻の袖とても読箋　大坂 俊佐

鐘の大声忘れねはん像　希周

涅槃像天下に昼寐はしめかな　大坂 矩州

ゑとゝ寐の姿教えて涅槃かな　涼仿

結句人をなすのぬものねはん像　心祗

ねはん会や釈迦に念仏をもらう日　蒼狐

傍佛八十我もしひ寐覚枕　伯幹

彼岸

何迷ふ彼岸の入日人だかり　鬼貫

桜咲くひらくに弥陀の彼岸かな　支考

極楽を覚えて居るゑのんかな　超波

参るも峰へ鉦もきこゆる彼岸かな　梅寿

寺ありて桜一木の彼岸参　枝静

誘ひ手をよるや彼岸花の波　羽咋 梛童

授記品ニ無有魔事

雲あらしの隠りて彼岸の夕日影　其角

苗代

苗代に待事なしや鷺の首　文麿

苗代と見てゐる声の窓の下　文考

苗代に急かぬ水のそゝぎ哉　子英

なはしろや二王のやうな足乃跡　也坡

苗代や嫁ハ子ゝなかり月　存義

苗しろや水も根強く啼蛙　在舟

苗代や動かぬ水の朝ぐもり　花県

定まりし苗代水のまむらちハ　真岡 市仙

菜花　菜蕪花

菜の花や戸口見つけて居りける　越中 嵐青

なの花の壁にいる日影哉　傘下

いの川のまふ宇ぬけの男花大根　貞佐

菜の花の世界にけふも入日かな　大坂 湊之

なの花や堤ひとつに利根の川　通玉圃

菜乃花れや小雨の中に蝶小てふ　雀舟

あまるなの下菜の花はまれき白な　芝水

深川木場にて

橋臺に菜の花咲す舟かゝし　宗瑞

芦角

川淀や泡を休むる芦の角　伊賀 樸雖

角くみし芦間の春やふるる川　之梅壽

水ハ是にまさるあり芦の錐　龍昇

燕

今来たといはぬばかりの乙鳥かな　堺 長之

燕や淀瀬の波と流れ合　貞佐

己ゝ身を落してもそらに去るかな　心祗

流ハくらや来てまつも人しらし　亀文

燕や笘の際ゆくもやひふね　梁山

うれしさに乙鳥ふるし岩の色　五梁
はつさらも傘尋る也　知恩院祐徳

帰雁

忘られやあらつきるにかへる雁　鬼貫
麦わけし雁とたちおくれの子　師分
ゆく雁の連まちるほや湖の縁　素竹

送別

雁の声ゆくと何百里　文考

蝶

蝶飛し比ハ見るそのひとりかな　湖春
蝶の飛ばかり野中の日影かな　芭蕉
夕日影町中に飛こてふかな　其角
菊ふりやあかり先は蝶のまよひ　貞佐
道芝に落ては跡し風は蝶　宗瑞
魂のあかとそつまは風乃蝶　乙祗
のとかさや大河をわたる蝶一つ　蒼狐

蝶いつか艸にそてなき風情なる　吐鳳

蝶〱や人に馴くとんぼの子　玉圃

西の浦風乃はしめや飛胡てふ　南部 秀億

のとけしな共菜にそまる身存の蝶　群長

蝶〱や何をみせ井の井乃ちゃうと　宝馬

てふ〱や田をよこくるのおうしろ　花跡

大寺の夜静なり石に蝶ゝ

画讃

お蝶とる猫も夢乃一歎のあ　京 如貞

蛙墓

手をついて歌申上る蛙かな　宗鑑

なくむおも見さま賤し墓　秋田 笑意

古池や蛙飛こむ水の音　はせを

家うしこ蛙啼江の星の数　其角

立田川もみちや於て赤蛙　支磨

たもふ車たまりてねる蟇　膳所 曲翠

結構な男と啼け蛙かな　乙由

蛙啼一声くに猿あし　鳴海 蝶羽

啼うちも花見かましの蛙かな　翠羽

又よ見る庭井の蛙田のかはつ　栗堂

田やぬるむ蛙の声も水の泡　公曳

雨の日とかはらぬ蛙押へつれぬ　蛙声

風巾

夕暮の物うき雲やいかのぼり　弋磐

咲け〳〵と花に欲なし凧の声　ちよ尼

かけちぎる心高やいかのぼり　素推

恵

侍著や抑へられ見の几巾　蓮之

接木

侍波羅鬼ヶ腕ハ付さる毒花　旧室

接うけし梅の京智やむかし兄　祗叶

たまされて接木に花のさくらかな　婆石

花を指に折りて咲し接かな　佐国

見来な接穂きし夜の物みたき　把菊

花

ちるまくとはゞかりもなし山　貞室
ながむとて花にもいたし頸の骨　梅翁
みよしのハ花を除て山もなし　京 友静
奥山や獨笑ゐる花のかほ　兵庫 之政
二軌の雲さや金泥に字の花　蝶々子
落くちるとけるき花の林の札　信徳
花の陰謡に似たる旅寝哉　芭蕉
花の雲鐘は上野か浅草か　〃

花に風輕く来て吹け酒の泡　嵐雪
花の姿は身を留むる重くるか　〃
花さかりきて身をもしたぬかな　其角
くもる日やみやこハ花の比おもて　猿雖
柿の花咲ゆきもの事ぞ色の中　加賀 北枝
暮なしよしくちるも花は垢　杉風
花さらの大腹中になりにけらし　〃
何事ぞ花見る人の長刀　去来
山や花垣根くれハ酒ならし　亀洞
鐘の声乃境ても花ちりかな　李吟

ちりすてゝ恋しくなる心一つに　さゝ川

花の雨小袖借りて帰るかや　氷花

果おて翠のちる尺の競ひかな　描几

花の山何所とらまくて歌よまむ　晨風

花ちくもむつかしける老木かな　木節

花の山誠の下戸ハ虚ちの栗　桂坊

死さうなる人も見ゆるなしちの山　古　祐徳

花の日や入相の鐘乃鳴て後　春来

暮る事も下戸ハ下手なく花の陰　蒼狐

存分に見んよとや花の夕あらし　い

こよしみやちのかけにふ人の家　越中　麻父

不二の雪まくら続くちくら里　梅郎

咲しせぬ計むつかしき夜ちの花　亀文

枝垂ありし花にむかふる人こゝろ　梁山

朝ゆく紀花乃中ゆく夜者哉　雅郎

内や内そ通ふりもちの幕際　公曳

江戸をとおもへ花さ角力の綱太鼓　素芹

哀れむのち見ゐるのか花にれ人さしも　順翁

花老ぬ日もきと近乃[illegible]の声　不禅

ちかふ人誘ひすまるとも見えさりけな　木丹

わすれぬる気六丈まて萩くさき　柳童
家の古の人みな見えて花の山　左籬
年月や花に明らん讀乃諸　花踪
入海ハ路くちろかに花ゝとを染　丶
いさましく晴て夜明の花まかせ　仙里
花籠屋と出るに花のよしみかな　秋方
はるや花に閉る此一くさり　平砂
國くの開帳も華の使とかや　沾涼
茶を煮る気色のふるき此老木哉　五蓮
花晴るゝ旅の朝出乃馬此旅　芝水

寄てまてまるもまの花の山　霍舟
草枕旅寝なれぬ人そ花のかな　丶
下戸なとハ知らし月夜の花の味　玉圃
出て見れハ出ぬ人ハすし花くさき　宝馬
花より見を尤める眺めに花そ景　邑波

卒都婆小町賛
花の色ハうつりに花衰へなきれ此景　季吟
よしみおく深くしけりて
優婆塞ハかりて足駄や花の雪　蒼狐

桜

花とやる桜や菜のうきせよのきて　丹波
賭みして降出されさくら狩　支考
まてこれハ眼ホ来かくや山桜　才麿
ちるハく酔のさめる夕さくら　自悦
明星や桜定めぬ山かつら　其角
初桜まさ遠くホ咲けハちそ　伊賀 利雪
糸さくら別当このそまの西　伊勢 洗く
やとるまも其桜としみを山　葛小

見ゆ入れハ人の脊戸之山さくら　希因
積楼なりみハさくらもちる会所　蓮之
分の花ハ人の治まる花さくら　ちよ尼
何ホまれて独くまし山さくら　ゝ
見ぬものをとるるぞ嬉し桜むし　ゝ
迚もなら松の命を山さくら　曲菴
円さますしや浴てつよる滝桜　旧室
降されて虹のそ形さや翌さくら　蒼狐
うれさもホとろくものよ初桜　心祇
手いよく名りゆくるれ桜られ　存義

塔さびて桜咲はく木の間哉　栗堂
関ありてはなちるゆるめぬ山路哉　ゝ
ちる人を指してゐるかさくら哉　雅郷
桜ちり西明や告る山庵　涼山
初桜清子の眼にハまさ子し　池亮
咲くも散るもひとへ桜の手際哉　吐鳳
稀花く朝窗人やさくら絵　玉圃
散散やむかふ風の渦はなら　芦皓
雪とんで雪残らし桜かな　燕志
もろこしのよし聞く楊貴妃桜　蚍旧

朝くもり桜に葦簾は余情哉　田檝
散ふとて花さかりに白しさくら花　窓雪
よの中を一夜にむ乃はならかな　宝馬
晩鐘やさくらかつきし物くるひ　律富
さくらさけば時山の大笑ひ　千外
人訓て藤へちりけり山佐くら　在轉
山なるに老をみえつりをは桜　霍郎

小町像賛

おことさへ風狂乱の姥さくら　梅翁

出代

出がはりや稚ごゝろに物あはれ　嵐雪
出代やおもはくの面も今計　了人
出かはりや此宿に物をまち出し　涼菟
出かはるよ舊籠に古き造りなど　宝馬
出代や夷とよめけるひらの山　素人
出かはるや旅伎風い女下女が名も　五種
出かはりやならひの春を惜まるゝ　吉家 佐国
出かはりの去年をやいとし女と見ぬ　雲鳳

雛

雛買にいつる程を名付二日月　貞佐
物いうかおもふ雛也るやかな　宗瑞
残雛や翁立出て峯の雪　貞山
此句者温故集ニ白雲と出す八非之
見ぬ虚を天の下く雛遊れ　桂坊
雛抱てたゝれて八重のすゝき哉　春来
負ひなすやそゝられぬ木も細工　亀文
紙雛の妹背や恋に疎き哉　梁山

なにとなくかさる時世や嫁の雛　鈍亮
寄雛やふける時そしも女夫連　存義
九重と八重に飾るや雛の壇　窪母
雛市や山のおくにも女の子　津富
古生の松乃若世や寄ひゐな　本丹
侍のかりして古しゆつり雛　邑我
紙ひなや三寸に七寸は立姿　花咲
夕くれの雛は川音くつろぎに色　花藍
心かりて雛無しかり人の妻　平砂
小姓にも吉孫むすひや母は雛　ゝ

何事ありけるよし
石女の雛かしつくそあはれなる　嵐雪

妻にわかれし時
まぬ雛娘の向にいそきむ　達暑

孫娘を先たちて
宿をとおて雛飾られぬ桃の宿　猿雖

桃花

姫乃桃結ひむすめのうは盛りかな　奎山

枝ゆりに力も見せる桃の花　尭狐
砂水の濁む流しや桃乃花　芝光
畦原や雉に遊ばしもゝの花　春郎
畑中や竹垣の傍乃桃の花　崔舟
日うらに麦八把うり畑は桃　貫太
実も今をなるて桃の花咲ぬ　操舟
深山とて桃の初花咲にけり　素登

曲水

曲水や岩に三つ組みつゝき　希因
曲水や塩を琴ひく柳陰　春郎
曲水や夕べハ花もちりめぐる　〃
曲水や艸の出ところに盃　平砂
曲水や手のれと傍かに同身役　〃
盃を流さし詩や作らくゞ　風舎
上巳の花前や酸ももめぐりけり　亀岱

汲丁

人寐むねと陸との汐干哉　友室

鷺籠ありて渋海へ来む汐干哉　京 如泉

雌雲の境とらえて志ほ干哉　希周

波風ハ松ふ乾ぬ汐干かな　蒼狐

此廣さ蒙るさかひしらぬ汐干哉　吐鳳

屁れ舟のまさくも兼ぬる汐干哉　津富

以ふ浦の苫やとまちや汐干狩　木丹

小弓引

籔ちる矢毛や雀小弓ひ哉　呉龍

若艸の芽麻流くま小弓引　兆亮

海棠

海棠や天窓剃子の顔の色　希周

盗むともあらせ眺るなかめかし　蒼狐

海棠や春ふ出るとぬ花のかり　梅寿

海棠や人ねの顔もつくハ流け　左簾

海棠や一むしろる小眼をさけ　木丹

山はしあふ見よとや夕日影　智丹
窮屈な庭ともいはし岩つゝし　治湖
附節来て陽の山はし咲る尾　雄跡
一株は石の活ふる躑躅哉　紫風

藤

松は藤蛸木に乃ぼる家しき宿　梅翁
草卧て宿かるころや藤のもと　なと栽
風なくて静遣ふちれ花　杉風

梨花

夕月や畠そふのに梨乃ちれ　梅郊
雨によし風にちやめる梨の花　花菱
月冴し夜やあわ梨れ去の里　雀舟
梨花一枝心なりけや園乃床　存義

躑躅

ぬき足やあめの下てる姫はしきて　て

藤浪や蜆売ちる下なかの路　才麿

松かつの乳喜へ哉藤の花　柳居

藤のたれかゝりて連にはくれから　ちよ尼

藤さくや流るる雲を引伸し　蒼狐

はらく日から藤を風情と栗の家　栗堂

くもりもしかり三尺あまりぬちれむ　春郷

のとけさや夕へ哉藤乃咲たるまゝ　吐鳳

藤はらくや杉みそ花をかゝげこの山　左簾

日の丈も探ふて藤れはらりけり　玉園

傘の手もゆるゝなから藤のちり　笠訣

春の日に底かけるの藤のたな　存義

亀戸社に詣てし比

藤はらくや梅花の来ねは語と出　井鳳

山吹

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

一重ゞと山吹迎く夕へかな　襟雪

る柄抜に山ふきみける流れかな　心祗

山吹や旭はしまる水の色　栗堂

ゐて川の山ふきみて京へ帰るさに　遊橋
やまふきやゐせきやなに咲こほれ　李克
山吹のちるを惜清水なかの水きは　青芝
山吹に弱とめよと見る人もなし　卜人

菫

何こころ住ぬにたよの菫かな　忠知
一輪や折ぬふのせしつみま艸　鬼貫
山路来て何やらゆかしすみれ草　芭蕉

焙炉のたまるあとなきすみれの花　野水
こころなや土こぼれのうくの椄箱　蓮之
古橋をかみそれ咲越る菫の家　希周
茶をせ出す乳母の子の手や菫艸　素玉
奈良ちかき御陵の内なんと菫菜　一巴
墳の根の白きも菜川もすみれ菜　風舎
山やまし路や飛火野もりすみれくさ　左簾
　たき残番のまき残尋ねて
すみれ艸小隅あらはし路や先　曲水

蚕

むかし出して天下ふ名ある蚕かな　白雲

宝馬夜々ふゆく帖

請合ふそ母の機嫌もかひこ時　蒼狐

桜鯛

かくし部ふかるハ洞をさくら鯛　梅翁

庖丁のなるやあくしさくらたい　未得

むく波かゝる網してさくら鯛　攝　貞伸

花ぐもりちかするりや桜たい　素玉

糸かけてこや咲くもまれさくら鯛　操舟

江戸あるやふうち鯛乃山さくら　花隣

小飴

汲飴

砂川の座ふかけろふ小飴あふ　純亮

岩なるとちるや小飴乃一ゑゐえ　平砂

蔭かちくくたる飴や水ひとえ　山蟻

混合

せこの春へき霄なり御り哉　守武
宇治の茶や浅香ちらねど花かつみ　伊安
人の親乃烏追ふか雀の子　探つら
たけかのや麦ハ桑また春の露丶
なの花ゆくおや水をゑそみつ辺　堺 成安
鶯の声ゆるめて登り山路哉　式之
いろいろに名もむつかしや春の草　珎碩
武さし摘み浅からん佐忘れ種　泰徳

鳥かなふ入相迄し峯の寺　心祗
雨たれて星ふるし望の木芽哉　喬里
たんぽぽや誰か草所さ尻れあと　作者しら
莇ふさ花あれハきぬぬる枕哉　春郎
田をた广の足あとみえてつくし哉　梅寿
ちる花や望なき家ゑ孑か哉　貞知
傘持も尻子業口や小松引　純亮
芝能や薪とあつて梅さくらゝ
かつ鐘や宝作の残る曲突の上　不禅
子蔵や十日の鳥ふ十乃指　春義

梅の香に酔ふ色いろの蜂の邑　羽州 石童
積塔や河原にいてゝ君の為　律富
独活うりの声さゆる日や庵ある町　蒼為
蜆とる比や川附の砂のいろ　素芳
葎乃戸や暮し花壇に蒔の蕋　壱我
紅白の花落葉や鶯あそせ　谷梁
清影供や女中れ舁の高雄山　角鹿
水口や溜りに志まぬ蟇れむ　平砂
あつらむと山の夕日や二日灸　木丹

春雑

かぞへ来ぬ屋敷〱の梅柳　芭蕉
鶯に夢の中出よびきかへる　其角
水くさき紀守や淡雪たてる月　支考
木瓜薊振してあそびはるぬ　山店
見あきれは梅にうらみて又かへる　栗堂
山吹のちり乃おふ諷や〆燵　素山

懐芭蕉翁

月花や洛陽の寺社残りなく　其角

奈良にゆきし比東大門のほとりにて

鶯乃尾落しやうめにゆる　蒼狐

暮春

行春をとめよ藤乃ちりかゝる　京　宗般

花見んとおしくとてや鶯は春　未得

おもふろ春を白酒売の名残かな　支考

口くせのよし悪も春乃行衛かな　済之

行春や竜巻ハ残す岩清し　希周

ゆく春を城ある帰もなかりし　尾州　也有

行春やをちかた人に雪おろし　呉夕

山まとく海に暮行し鶯の春　花城

暮春たや名残をしかれ角の俤　笠訣

惜け花は生れても月乃ごとし　如雷

行春や鉢猫の腹も亥れ果　秋色

鶯かなむ声も春の名残かな　高岩　露水

又春を惜む之十日と成ニ急　不言

誹諧古今句鑑　春之部終

附録

春之部

一陽井素外

かしこくも月日の春やこつれ朔

西川こそと聴ゆ夷の旦哉

祝ふの卯　鶯きくいねれあけとそ

門雲やくしふりなる三日乃月

菜摘ぬるみ摘さしれ若菜摘

沈もとぬる雪も夢のも夷の夜乃

雪佛何アりし罪もきえぬへし

鶯もほのほよき梅のはつか哉

梅はやくやんめもくさを宴うし

咲添む梅乃ちれやちれ色

蕪入の実をえのなや軒の梅

あくれ芽ハ小雨ふる日の霞哉

若艸やくさちなるもの芹薺

すのくさや夷めく垛の小表

艸の夷野風炉小扇尺初亀

鶯まゑてたてまゑ夜明の山乃笑

ゐらむとすれと遊ふや春の水
のとけしな菜刈も藤川牛も藤
うき妻み川れそつれしく梵
祖ひ古く人や堤の春かすみ
陽炎や砂をよせし梅のもと
利うの小梅白ふ夜や月小暈
おぼろ夜八月小見り入ちくろ梵
夷八もみくをうし夜なり朧月
枕もて小窓ふる日を寝法春
明る夜残ふうきる春や鄙のま

人吉小鶯遊る志川の比よ
鶯や傾ねと人了きき下毛
柳影日も夕ア々の伸動む
瀬とけて百墳さ紀柳まゝ危
と川ふうと日も入りさの柳の子
月明りこ夜の柳れおさやゝ比
志積一アんはれれなすの夕れ梵
早蕨や菜小吹風の信うしら
落つぬ广の出そや芦の角
行广や残乃寒さのたまれきふ

乙鳥は来るや光陰矢の如し
ゆられぬ蛛や虻寺の彼岸詣
蛙啼く月やハ物をおもハせる
何をし見て帰るいふその蜃楼
足曳の山田乃かち川そひ出ぬ
桜咲くを里雀やいか娘ほり
接穂してある影ミや雨二日
接穂見てもハまとられぬなる
鶯やうみをも花乃暮
来て見れハ花の山寺人若し

後夜も今月夜の花は見ひかず
月影さへ風なき花乃ちるあはれ
親と子気一本さすかし花の陰
爲風のきしらぬ江戸は花
家小出る足弱人や山さくら
汗たまや花見ん雛の小人形
我雛や日和まちゆき目鼻立
さくら桃小山蟻乃ぼるけるさよ
立てゐるさ戸や汐干の岸は松
小貝拾ふ人も気よ紀汐干かな

并根むしろや斜日の梨の花
あらし吹や紛帽にかゝる荒やしろ
咲初るさくらや艸の浦をつれ
夜ハ寒し蚕飼ふる家の枕屏
并棧に一枝ふりやたらゝら
孫ともにあそめられてそ壬生念仏
鶯の鳴きを謝るやさもひの春

睦月九日湯島の　御神に詣り廿日
まつのさかりに

御梅の花にむかうまてや春乃冬

幽栖

我々の春や春日乃かくしらさ

　皇し爽伊勢に行人を送る

生涯の種や春にも余寒有

　花乃比瀬子ありくる方に

挨拶て返しハ麻らか家たらら

　律家さちの要なゆく時送る辞して

ゆくハ春夏見むつまき名ひ都

　上列大同ゝの人ならるかれらとかれて

棗の芽やつめとも若きうしろ付

巳三四四三
ヘイグハ
ウチハ

附録春之部終